

百間余の波浪場へ。まことに威勢しと。射樓磐頓譲を
も。礪ことと連ねり。信長不思議小ちやうゆ。繩く
公解み投せひ。夏吉郎と召出され。よく神速か威勢せり。
大功なりと仰いだ。夏吉郎平伏し。これ小すが
功をば。單か君の仰威光也。人扶も粉骨碎力せど。
厥もた繩か何と。二日か成物もぐんや。怪き渠うる
木寮ざもへ。御詔賜へ。作で被ひそむると言
も。小信長実ふもと思され。棟梁共を呼び出させ。御声
ちくこのごとの粉骨大儀なりと宣ひつ。まくる吉ふも
最厚く。寢称あらて名をあへば。夏吉郎へ人扶を率く
修理成終せる。びと。と酒食と多く知へつ。款待する
石どか八百餘人の人扶ざも。ありふまふそそりでき。夜と涼し
とぞ歸り。向ふ木下夏吉郎へ。朱やの繩とひ勞せり。
禁るふ繩田飯這次の夏吉郎が功と。深く感賞せられ。百費
の糸引加場と賜ちる。治田勝三郎信輝令を奉て。執行の
褐虫と後し。向ふ夏吉郎治田とひて言咲しき。治
か堵の義とへく。あうづく謝へ奉る。然もえぐく。這の事
寝まへぬ三年間追ひきりふべし。其易と。只今二百
貫文のち。目押借りまへて。おも。おも。おも。おも。おも。おも
と言ふと繩田飯聞こめられ。か堵の武士の至むところ。世
財へ眼差の利のとふと。武家のいもじれぬると。いうより
所存のある繩あ。と思され。うども恩賞うきと。所存